

# 広島流川教会における 復興と音楽との歩み、及びその原点

— 谷本清・太田司朗を中心として —

光 平 有 希 (総合研究大学院大学 博士後期課程)

## はじめに

一九四五(昭和二〇)年八月六日の原爆投下後、廃墟となったヒロシマで、音楽と共に復興への道のりを歩み続けた教会があった。それが広島流川教会である。広島流川教会は爆心地から二キロ圏内に存在し、教会はわずかな壁を残し焼失してしまった(写真①)。しかし、教会関係者たちは互いに協力し合ってそこからいち早く立ち上がり、同年の年末には失意の中にいる広島市民を音楽で励ますために動き出したのである。

本論文では、広島流川教会が音楽と共に進めた復興の歩みの足跡・原点が見られる終戦から一九五一(昭和二六)年までの六年間に焦点を当て、音楽活動と音楽教育において中心的な役割を果たした谷本清(一九〇九(明治四二)年—一九八六(昭和六一)年)、及び太田司朗(一九〇四(明治三七)年—二〇〇〇(平成十二)年)の姿を通して、一・谷本清と太田司朗の人物像、二・広島流川教会における戦後から一九四七(昭和二二)年の音楽活動、三・戦後、広島流川教会で《メサイア》が歌われるまで、四・クリスマス特別番組『クリスマス音楽礼拝』



写真1 被爆後の広島流川教会

の概要、五・平和の礎となる音楽教育に込められた願いという順で、広島流川教会の戦後、音楽との歩みに込められた思いについて考察していきたい。

## 一・谷本清と太田司朗の人物像

まず、本論文で着目する谷本清と太田司朗とはどのような人物であったのだろうか。

谷本清は一九〇九年、香川県坂出市に生まれる。関西学院大学神学部を卒業後、一九四〇(昭和十五)年にエモリー大学大学院を修了。沖縄中央教会牧師を経て、一九四三(昭和十八)年に広島流川教会の牧師に就任する。



写真2 谷本清

一九四八(昭和二三)年より数度にわたって渡米し、現地で講演を通じて広島の様状と平和を訴えるとともに、流川教会復興にも奔走した。一九五〇(昭和二五)年八月、ヒロシマ・ピース・センターを設立し、被爆した少女や孤児の救済活動にも尽力した。一九八二(昭和五七)年に流川教会牧師を退任。退任後も平和活動に勤しみ、一九八六年の死後、故人としては異例だが、生前の功績を讃え、エモリー大学から名誉神学博士の称号を授与される。また、一九八七(昭和六二)年にはヒロシマ・ピース・センターによって谷本清平和賞が創設された。

一方、太田司朗は一九〇四年、広島市に生まれる。広島師範学校を卒業後、直ちに同校附属小学校に奉職した。その後、母校である広島師範学校の教壇に立つが、一九五二(昭和二七)年、四八歳の時にエリザベト音楽大学へ移り、声楽主任教授として活躍した。フランクのオラトリオ《至福》の本邦初演や、メンデルスゾーンのオラトリオ《エリア》の訳詞公演をはじめとし、数多くの合唱を指揮した。そのため、中国地方に合唱連盟が結成されるにあたり、その初代支部長に推され、併せて全日本合唱連盟の理事として合唱音楽の発展に力を注いだ。エリザベト音楽大学を定年退職した後は、比治山女子短期大学で幼児教育科主任教授として活躍し、その後、これまでの功績を讃えられ叙勲も受けている。太田が広

島流川教会に入会したのは戦後のことであるが、その後、谷本と共に教会で数多くの音楽活動を手掛けていくこととなる。

では、谷本及び太田は、戦後どのような音楽活動を行ったのであろうか。終戦から一九四七年までの広島流川教会における活動に目を向けてみたい。



写真 3 太田司朗

## 二、広島流川教会における戦後から一九四七年の音楽活動

谷本の残した直筆の日記によると、一九四五年十二月二三日には、早くも海田市に駐屯していた占領軍兵士数名を迎えて礼拝と祝会が催され、そこではクリスマス・カンタータが演奏されたと記録されている<sup>(1)</sup>。次いで翌年の一九四六(昭和二一)年八月四日の日記には、原爆犠牲者追悼慰霊礼拝が開催されたことが記されており、その時のことについて谷本は、以下のように述べている。

畑夫人は教会のオルガニストとして奉仕された方である。太田司朗氏は長男を原爆で失い、夫人と共に熱心に求道をされた。「中略」太田氏も畑夫人も師範学校の音楽教授であるので、楽器なくとも聖歌隊をうまく指導した<sup>(2)</sup>。

ここには、太田と畑を中心として聖歌隊の指導が行われた様子が記されている。太田と並び聖歌隊の指導を行っていた畑とは、教会のオルガニストでもあり、広島師範学校の教員として主としてオルガンやピアノの指導に従事していた、畑とみえのことである。また、同年十二月二二日には第一回市民クリスマスが開催される。このことについて谷本は同日の日記で次のように述べている。

教会はクリスマス直前に屋根が出来上がり、二二日はクリスマス礼拝をなし、午後市民クリスマス会を催し、一般市民を招いた<sup>(3)</sup>。

ここから広島流川教会では、被爆翌年にあつて、また教会が完全に復興していない段階から、既に教会内のみならず広島市民に向けてクリスマス会を催していた様子が窺える。

では、続く一九四七年にはどのような活動が行われたのであろうか。この年は、年明け早々に広島流川教会で大きな演奏会が催されている。この年一月四日に、海田市に駐屯するオーストラリア陸軍音楽隊と広島在住歌手による復興資金寄附感謝音楽会が開催されるのである<sup>(4)</sup>。この模様は一月六日の『中国新聞』に、「春は喇叭の音に乗って 教会復興音楽会に進駐軍も出演」という見出しで、次のとおり紹介されている。

新春広島島のトップを切つて、進駐軍音楽隊と在広ボーカリストたちの奉仕による第一回コンサート、日本基督教団広島流川教会の復興資金寄附感謝音楽会が四日復旧半ばの同教会でひらかれた。この日リッツウエイ准尉の指揮のもとに三十五名の軍楽隊のワルツ、『金と銀』やコルネットソロなどつぎつぎに楽しい曲の演奏の間あいだに、福原信夫氏赤木峰吾氏加納純子さんその他の独唱がつけられ荒涼たる原子砂漠のなかにやがて聴衆の寄附によつて再建される心の安息所、神聖なる教会を賑にえがきながら、五百の音楽ファン達を魅了して四時プログラムをとじた<sup>(5)</sup>。

この演奏会ではオーストラリア占領軍音楽隊三五名による演奏のほか、当時 FK (NHK 広島放送局) のプロデューサーであつた福原信夫、また広島西部教会牧師の赤木峰吾、広島流川教会員の加納純子などによる独唱が行われ、五百人もの聴衆が荒野の中で、その演奏に聞き入った様子が報告されている。また、同演奏会について、谷本は日記において以下のように記している。

午後一時半から、屋根だけ新装の礼拝堂に借りてきた椅子を並べ、進駐軍の軍楽隊を招いた音楽会を開催した。「中略」これにより復興支援五千六百円を得た<sup>(6)</sup>。

ここでは新聞記事には掲載されなかつた復興支援金まで具体的に記載されて

いる。また、前年の一九四六年十二月二七日の日記には、演奏会に至るまでの準備過程についても述べており、そこでは以下のように記している。

教会復興のため慈善音楽会を開催するよう隊長の許可を得て軍楽隊に交渉してくれたのはチャプレン Christian<sup>(7)</sup>で、私も教会のメンバー中、太田、畑、山本等音楽家に奮起してもらい日豪交歓音楽会を準備した<sup>(8)</sup>。

ここでもやはり谷本は太田の名前を挙げ、この演奏会の準備活動においても、彼を含む教会員が中心人物であったことを示唆している。そしてこの年の暮れ、一九四七年十二月二日には広島流川教会でのクリスマスが行われたほか、十二月二四日には日中に第二回市民クリスマスが、また、同日夜には特別番組『クリスマス音楽礼拝』の放送がそれぞれ行われた。この十二月二一日と二四日にはいずれも、ヘンデル作曲のオラトリオ『メサイア』が演奏されている。

では終戦後間もなく、楽譜も手に入りにくいこの時期に、なぜ大曲『メサイア』を演奏することが提案され、またそれが実現したのであるのか。戦後、広島流川教会で『メサイア』が歌われるまでの経緯を追ってみたい。

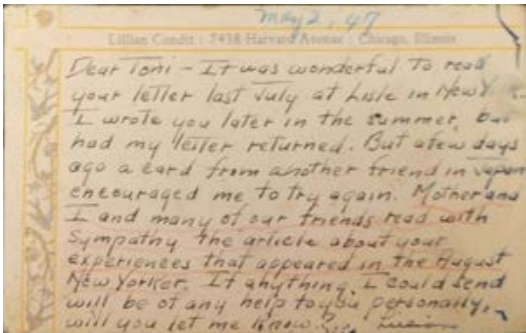


写真4 コンディットから送られたハガキ。シカゴでの消印は5月2日である。

三、戦後、広島流川教会で『メサイア』が歌われるまで

広島流川教会で『メサイア』が歌われるに至るその起点は、リリアン・コンディット Lillian Condit (一八九六—?) という一人の女性から届いたハガキにあった。一九四七年五月二九日、シカゴのコンディットから谷本宛てに一通のハガキが届く(写真4)。その内容は以下の通りである。

親愛なるタニ 昨年七月、ニューヨークのライルであなたからのお便りを受け取った時には、とても驚きました。それから少しして、お返事を書いたけれど、それは戻ってきてしまったわ。ところがその数日後、日本にいる別の友人からハガキが届いたのよ。それを見て、もう一度お返事を送ってみようと決めたの。八月、『ニューヨーカー』に掲載されていたあなたの体験に関する記事を読んで、母と私、それから多くの友人たちが案じています。あなたのお役に立つようなものは何かあるかしら。お送りしますから言ってくださいね。

リリアンより

コンディットは一八九六(明治一九)年生まれで、谷本より十三歳年上である。シカゴ・イリノイ州で高校の音楽教師をしており、谷本とコンディットは谷本の戦前エモリー大学留学時代にライル・フェローシップで知り合ったと考えられる<sup>(9)</sup>。このフェローシップとは、各国の若者に、夏休みの期間、各地で研修する機会を提供する団体であり、一九三九(昭和十四)年七月十九日には、谷本を含む各国の留學生の交流の様子が『Binghamton Press』の夕刊に掲載されている(写真5)。

『ライル・フェローシップ登録名簿』によると、コンディットは一九四四(昭和十九)年ニューヨークでもこ



写真5 “Binghamton Press”記事 左から2人目が谷本



のフェローシップに参加しており、この時には留学生の世話役をしていることから、谷本が留学生としてフェローシップに参加していた時にも、彼女は学生としてではなく、世話役として関わっていたと推測することができる。  
そのコンディットについて谷本は日記で以下のように記している。

彼女は〔中略〕老母をみるため結婚もせず、長期休暇も旅行しないのだ。ひたすら母のために生き、又母も彼女を唯一の頼りにしている。ひたすら親孝行の婦人である<sup>(10)</sup>。

このように、献身的なコンディットに感銘を受けていた谷本は、戦後彼女から届いたハガキの申し出を受け、太田との相談の末、《メサイア》の楽譜の送付を依頼するに至る。そして一九四七年十月、彼らのもとに《メサイア》の楽譜三〇冊が届けられた(写真6)。

そして、この《メサイア》を練習すべく、十月十二日、日曜礼拝の後に男女混声合唱の聖歌隊が結成され、太田による指導のもと合唱練習が開始するのである。その様子は、十月十五日『朝日新聞』で、「米国からXマス・プレゼント―広島市民へ賛美歌集―」という見出しで次のように報じられている。

米国のキリスト教世界愛実践研究会から広島市上流川町メソジスト教会にあて、ヒロシマ市民へのクリスマス・プレゼント―にと分厚い灰色の

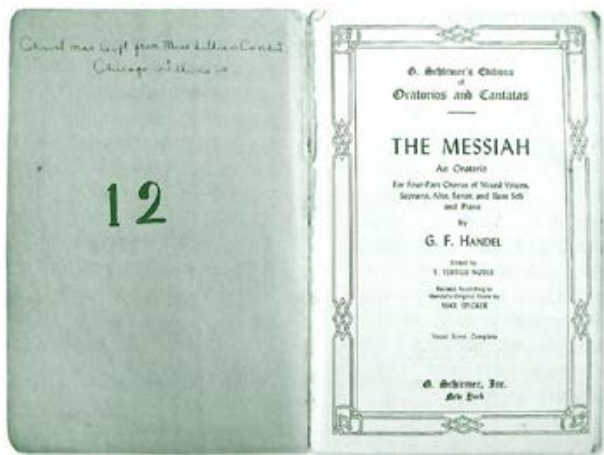


写真6 コンディットから贈られた楽譜  
楽譜の表紙裏には当時の流川教会教会員によって次のように記されている。  
*Christ mas Gift from Miss Lillian Condit Chicago Illinois*

表紙のクラシックな賛美歌集が送り届けられた。同教会では早速十二日の日曜礼拝のあとで男女混声合唱の聖歌隊をつくり今冬の市民クリスマスに贈ろうと練習をはじめた。

この研究会は毎年夏米国ニューヨークの郊外リスレーに世界各国から留学の大学生たちが集り研究のつどいを行うもので通称「リスレー・フェローシップ」といわれ広島メソジスト教会谷本清牧師が米国エモリー大学留学中このメンバーに加わっていたものである<sup>(11)</sup>。

練習の末、《メサイア》が戦後の広島流川教会で初めて演奏されたのは、十二月二日、広島流川教会クリスマスマスにおいてであった。この様子は、十二月二日『夕刊ひろしま』で「ハレルヤの合唱声高らかに―きのう流川教会―」という見出しで、次の通り報じられた。

ハレルヤの合唱声高らかに歌う聖クリスマス誕生に、平和再来の今年の暮の喜びを伝えて、広島市上流川町キリスト教会では市内のトップを切つて二十一日午前九時からクリスマス祭を挙げる。礼拝、洗礼式などあり。午後一時から幼稚科の『コンコン小狐』遊戯、中等科の合唱、高等科女子の『聖き夜』の劇、初等科の合唱『み空にひびく』榎瓜氏の独唱、青年部の劇『クリスマス・トロール』など盛り沢山の催しがあった。

なお市内キリスト教団合同で二十四日午後二時から流川教会で一般市民のクリスマス祭を行うことになっており、一般市民の参加を歓迎している<sup>(12)</sup>。

ここでは《メサイア》の中からへハ



写真7 当時の《メサイア》練習の様子  
写真上段左端が谷本、上段左から三番目が太田、そして下段右端が畑である。

レルヤ)が歌われたこと、そして祝会では広島流川教会を母体教会とする広島女学院の学生も含み、演奏のほか劇も行われた様子が窺える。また、一般市民へ、二四日に行われる市民クリスマスへの参加を呼び掛けている様子も分かる。

そして、十二月二四日当日、この日は午後二時から、広島市基督教総合会主催で、広島流川教会において第二回市民クリスマスが行われた。プログラム(写真8)によると、流川教会聖歌隊が《メサイア》の合唱を抜粋で演奏したほか、太田によるバス独唱として《視よ汝等に奥義を告げん》と《ラツパ鳴り渡りぬ》の二曲が披露されている。そのほか、YWCAや広島教会及びバプテスト教会の教会員などもそれぞれ演奏を行った様子が窺える。なお、広島流川教会の週報には、この市民クリスマスには、聴衆と演奏者を併せ七百人もが参加したという報告がなされている。<sup>(13)</sup>

そして同日午後六時三〇分から四五分までの十五分間、広島流川教会で、クリスマス特別番組『クリスマス音楽礼拝』が行われた。

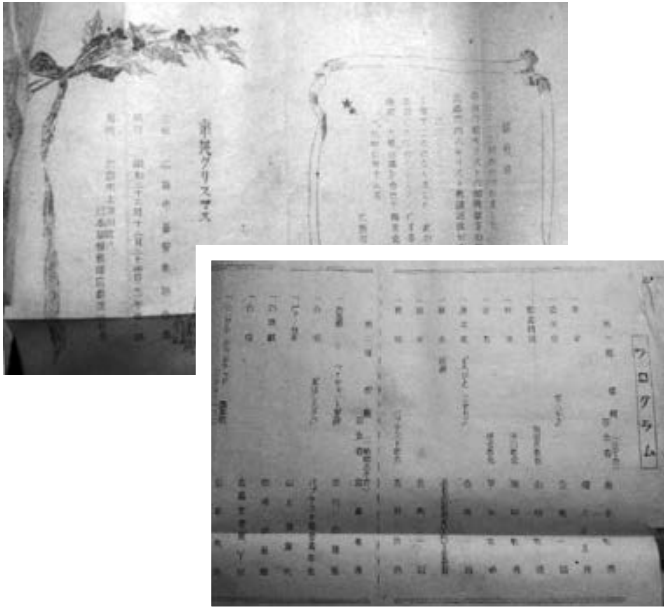


写真8 昭和22年12月24日に開催された「市民クリスマス」のプログラム

四、クリスマス特別番組『クリスマス音楽礼拝』の概要  
このクリスマス特別番組『クリスマス音楽礼拝』は、FK第一放送により、広島流川教会から生中継で放送された。

番組の担当者は、プロデューサーが福原信夫、合唱が広島放送合唱団及び広島キリスト教連盟聖歌隊、そして管弦楽が広島放送管弦楽団、指揮は管弦楽伴奏のものに関しては水野康孝、讚美歌などオルガン伴奏のものは太田が担った。谷本家に残る進行表によると、その礼拝の内容は次の通りである。

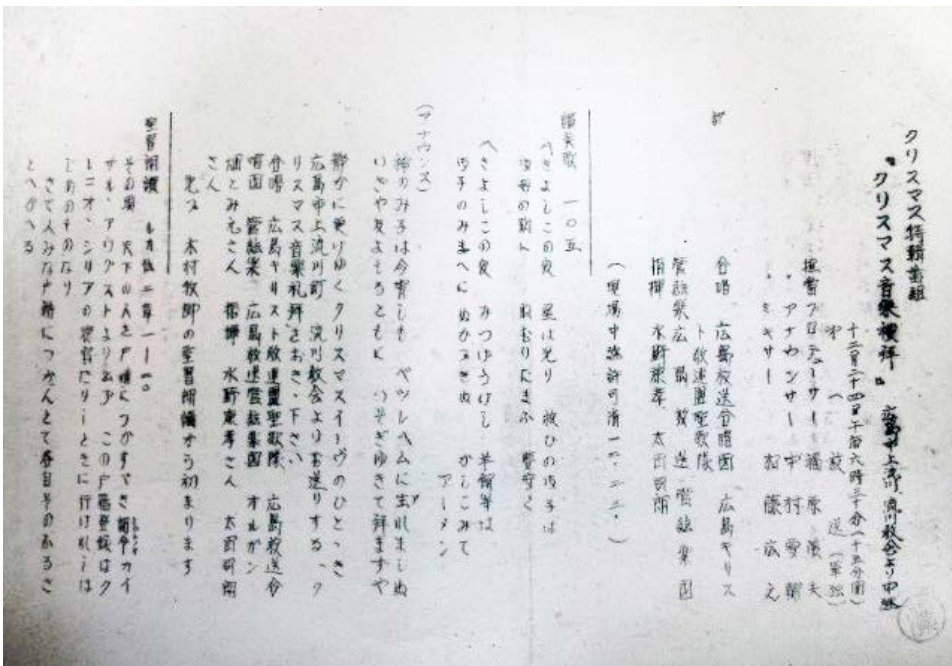


写真9 ラジオ番組「クリスマス音楽礼拝」の進行表

讚美歌一〇五 (きよしこの夜) 合唱／オルガン伴奏)

聖書朗読 (朗読：バプテスト教会・木村牧師)

讚美歌八八 (もろびとこぞりて) 合唱／オルガン伴奏)

祈禱 (祈禱：広島教会・四竈牧師)

ハレルヤコーラス《メサイア》より《ハレルヤコーラス》合唱／弦楽伴奏)

本礼拝における祈禱の後半部分では、次のような祈りが捧げられている。

今や戦争も終りを告げて、平和の礎があらたに世界の人の心に据えられようとしているとき、救い主キリストの愛と平和とが、ここにあらためて我等の真実の問題として省みられねばなりません。彼の愛こそ実に我等の愛となるべきであり、又我等の真の平和は実に彼の平和の中にのみあるのであります。原爆の地広島が、このたび世界平和のために大なる犠牲を払いましたのは、無意義なことに終るでありましょうか。犠牲をかえて祝福となし給うキリストの御精神が、今こそこの広島に活かされるべきを信じて疑いません。お救いの神よ。願わくばこの日、世界のあらゆる争いと憎しみ、汚れと恥、罪と不真実を潔めて、栄光に輝く神の国の正義と平和とを充ちさせ給え。特に祖国日本の霊的復興のために、又戦争の惨禍によりて犠牲多かりし同胞兄弟姉妹上に、みめぐみの豊ならんことを切に祈り奉る。救主キリストの御名によりてアーメン<sup>(14)</sup>

ここでは、被爆地ヒロシマで切々と真の平和を願い、「救い」を求める祈りが捧げられている。そして、この祈禱の後に、邦題で「救い主」を意味する《メサイア》が演奏されるのである。《メサイア》はキリストの生誕から受難、復活までをあらわしたオラトリオである。その一連の流れを、復興を願う広島に重ね合わせ演奏することを希望したという見方もできるが、それ以上に、谷本と太田が切望した《メサイア》には、「救い」を祈る、当時ヒロシマに生きていた人の強い願いが込められていたのではないであろうか。

五、平和の礎となる音楽教育に込められた願い

さて、谷本と太田は、音楽により「救い」を祈るのみならず、音楽は平和の礎となるとも考え、音楽教育にも尽力を惜しまなかった。彼らは、一九五一年十月、太田の師範学校時代の弟子であり、当時、国泰寺中学校の教師であった板野平(一九二八(昭和三)―二〇〇九(平成二二))を、アメリカ・ダルクローズ音楽学校に送り出した。そのことは、一九五一年九月三日の『朝日新聞』に「原爆地によい音楽を―広島音楽の先生が招かれて米国に留学―」という見出しで報じられる。その内容は以下の通りである。

「原爆広島」へのアメリカ人の友情で、経費一切を支給され、同市国泰寺中学の音楽の先生板野平氏(二三)が今度リズム音楽で有名なニューヨーク・ダルクローズ音楽学校に留学することになった。

広島市メソジスト教会牧師谷本清氏が一昨年から今夏にかけてアメリカで広島市の現状を講演旅行しコネチカット州ウェストボートのダルクローズ音楽学校教授ミス・ウラナ・クラークに会った際「広島の荒廢の地に心の糧となる音楽がほしい」と述べたことがきっかけで、同牧師の話が強くクラークさんを打ち「ひろしま」の著者ジョン・ハーシー氏や原爆孤児の精神養子を提唱したニューヨーク土曜評論主筆ノーマン・カズン(ママ)氏ら広島に関係の深い人達も加わって、結局「広島の人々によい音楽を贈るには広島の有能な音楽教育者を十分アメリカで勉強させるのが一番よい」ということになったもの。

旅費はドラ財団、学費はダルクローズ校の奨学資金から出し、教育指導にはクラークさんが、その他生活上の保護にはハーシー、カズン(ママ)両氏が当り、留学中の下宿までちゃんと用意して迎えるという。

十月早々渡米に決った同氏はうれしそうに「ダルクローズの課程をマスターするには三、四年かかるそう、皆様の好意にむくいるため力の限り勉強して来ます」と語った<sup>(15)</sup>。

ここからは、荒廢のヒロシマの地に心の糧となる音楽を求めた谷本や太田の強い信念が窺いとれる。それと同時に彼らは、ヒロシマ、そして日本の平和的復興



のためには、音楽活動のみならず、これからの時代を担う幼い子どもたちへの音楽教育が必要であるとも考えていた。その一つの表れとして、板野がアメリカで得た新しい音楽教育の萌芽が開花し、ヒロシマそして日本中で拡がることを願ったのである。板野は彼らの意思を継ぎ、帰国後は東京の国立音楽大学で教鞭をとりながら、二〇〇九年に他界するまで、全国各地で精力的にリトミックを中心とした幼児音楽教育の普及に尽力した。

以上、ヒロシマの復興を音楽と共に歩んだ谷本及び太田の姿は、音楽に「救い」や「心の糧」、そして「平和の礎」の願いを込め、表面化し、目に見える復興のみならず、市民の精神的復興の重要性を提起しているようにも思われる。

最後に、谷本の言葉を引用したい。

教会の聖歌隊は太田司朗氏指導の下に永い間毎週練習し、クリスマスには市民クリスマスや、中央放送局によるクリスマス音楽礼拝で美しい合唱を響かせた。Miss Lillian Condit の友愛は Händel の Messiah となつて広島<sup>(1)</sup>の原爆砂漠をうるおしてくれたのであります。

彼らは教会という組織に属していたものの、その組織のためではなく一貫してヒロシマの地のために、そして市民のために音楽を奏で続けた。また、当時のヒロシマが潤され、さらに今も広島でなお恒例としてクリスマス時季に演奏され続けている《メサイア》には、アメリカ人と日本人の友愛がその根底にはあったということも特筆すべきことであろう。

### 追記 「クリスマス音楽礼拝」の復元

二〇一四(平成二六)年十二月、復興期のヒロシマにおいて教会の音楽活動が果たした役割を振り返り、谷本や太田の願った平和に対する想いを紹介するとう着想のもと、今回の調査で明らかとなったラジオ番組進行表を元に、一九四七年十二月二四日に開催された『クリスマス音楽礼拝』の再現を行った。演奏会名は「ヒロシマ・音の記憶 vol.5 ～生きる～」、会場は移転し建て替わった広島流川教会である。第一部では「クリスマス特別番組『クリスマス音楽礼拝』の復元

そして第二部では《メサイア》の抜粋演奏を行った。

来場者は一八三人。谷本や太田、コンディットをはじめ、音楽礼拝の実現に関わった人々、教会に集まった当時の聴衆の状況や心情に思いをはせながら同じプログラムを体験した。来場者からは、「六七年前に語られたヒロシマの真の言葉を音楽を体験し、当時の人々の思いを考えると涙が止まらなかった。」「食糧も衣服も足りなかった中で物資ではなく、楽譜を、そして音楽を求めた人々の想いに触れることができたのはとても貴重な機会で感慨深かった。その音楽と、なにより救いを求めて《メサイア》がヒロシマで歌われ、現在も歌われ続けていることを後世へと伝えていかなくてはならないと痛感した。」「音楽を通してヒロシマ、平和を考え、訴えることの意義を再認識した。」など多数のご意見をいただいた。



写真 10 復元された「クリスマス音楽礼拝」

日時	二〇一四年十二月十三日(土) 午後六時から
場所	日本キリスト教団 広島流川教会
出演者	●総合指揮者(松浦修) ●合唱指揮者(小玉好行) ●ソリスト(ソプラノ・乗松恵美、アルト・井上美和、テノール・垣安利秀、バス・折河宏治) ●オルガニスト(大代恵) ●合唱・「ヒロシマと音楽」合唱団・管弦楽・「ヒロシマと音楽」管弦楽団
演奏内容	●「歴史背景の説明・スライド」 ●クリスマス特別番組『クリスマス音楽礼拝』復元演奏 ●讃美歌一〇五(旧) ●聖書朗読 ルカ伝二章一―二〇(武田真治牧師) ●讃美歌八八(旧) ●祈祷(播磨聡牧師) ●ハレルヤコーラス ●メサイア抜粋演奏
第二部	

謝辞

本論文執筆にあたっては、多くの方々にご協力・ご支援をいただいた。中でも特に、谷本家及び太田家、そして広島流川教会の皆様には資料収集の段階から懇篤なご指導とご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。そしてライル・フェローシップに関してはケニー・マーク氏より貴重な情報をご教示いただいた。多くの助力と励ましを与えてくださった皆様方に、この場を借りて深く感謝の意を表したい。

写真

写真①②④⑤⑧⑨に関しては、谷本家所蔵品  
写真③に関しては、太田家所蔵品  
写真⑥に関しては、広島流川教会所蔵品  
写真⑦に関しては、松江祥子氏収蔵の写真を長西貞美氏より寄贈していただいた。  
写真⑩に関しては、著者提供

注

- (1) 谷本清による直筆日記 一九四五年十二月三日 (谷本家所蔵)
- (2) 同日記 一九四六年八月四日
- (3) 同日記 一九四六年十二月二日
- (4) 海田市に駐屯していた第六七オーストラリア歩兵大隊の当日の部隊日誌に、軍楽隊が広島市内のキリスト教会で演奏会を開催したという記述がある。
- (5) 『中国新聞』一九四七年一月六日付記事
- (6) 前掲谷本清による直筆日記 一九四七年一月六日
- (7) 占領軍には兵士の宗教に応じた宗教者が従軍しており、ここではキリスト教の従軍司祭・牧師のことをさしている。
- (8) 前掲谷本清による直筆日記 一九四七年十二月二七日
- (9) コンディットの人物像に関しては、ライル・フェローシップ保管の各登録者資料及び谷本清による日記を参考にした。また、フェローシップからの情報によると、一九三九年～一九四〇年の夏に双方とも参加登録していることから、二人がこの時期に出会ったことが分かる。またこの情報は同団体文書係ケニー・マーク氏の助言による。
- (10) 前掲谷本清による直筆日記 一九五二年七月二七日
- (11) 『朝日新聞』一九四七年十月十五日付記事
- (12) 『夕刊ひろしま』一九四七年十二月二二日付記事
- (13) 広島流川教会『週報』一九四七年十二月二八日
- (14) 前述「進歩表」に記載されていたもの。現代仮名遣いに直し、句読点を付した。
- (15) 『朝日新聞』一九五一年九月三日付記事
- (16) 谷本清による直筆原稿 (谷本家所蔵)